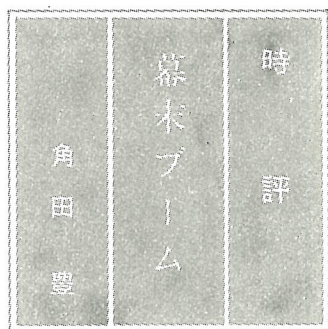




1

大晦日に、家のすぐ前の工事用道路で石につまづいて足をねん坐してしまった。新年早々出るくこともできず、家にこもってこたつで暮らした。昨年四月、静岡から同志社大学に移り、はじめて迎えた正月なのに、高槻市の北部、阪神高速道路の側の田んぼに囲まれた自宅からぬけ出すこともできず、いわんや京都の元旦の景況を目で見ることができなかった。所在なくて、テレビの番組みやら、最近の雑誌や本を、こたつ勉強の合間に見ていると、時代劇・歴史小説のメッキが多くなった中に、幕末ものがすっかり多くなったのに気がついた。私は元来が呑気坊主の上に、静岡という気候温暖で海の幸山の幸の豊富なところに十二年半もいたので、すっかりタガがゆるんで、推理小説や歴史小説が好きになってしまった。それもはじめのうちは、ガードナーは弁護士でベリー・メーソン物は法廷場面がすぐれているし、誤審の実話物語を出して、権利擁護の努力をしているのだとか、大菩薩峠の中里介山は、明治社会主義者の出であるとか、村山知義の忍びの者は面白いとか言っても、少しは話になり、同じ大学に高杉一郎などという文学者で、市民講座の企画家の先生がいて、大衆小説の話を純真な静岡市民にさせられたりした。ところが最近では推理小説も

歴史小説もブームになってしまつて、とてもその主なものだけでも目を通す暇はなくなつていた。

テレビも、中村竹弥という俳優が「鞍馬天狗」をやつたり、「近藤勇」をやつたりしていたが、昨年は、もっぱら「忠臣蔵」とオリピック・ニュースかと心得ていたら、最近になって、信長・秀吉・家康ものと幕末ものが幾つも放送されているようだ。中でも「幕末」は見て、面白いと知つた。そのほかにも「風雲児中村半次郎」だの「西郷隆盛」だのあるし、少し前には「父子鷹」もあつたそう

だ。われわれ四十代はじめの者は、子供から少年時代に、チャンバラ映画ということで、大河内伝次郎の丹下左膳などと一緒に、阪妻の近藤勇だの、嵐寛の鞍馬天狗などを見て、育つた。しかし、昭和十七年の春に大学に入つた時、明治維新については、尊王攘夷・王政復古の面ばかり強調される時代だつた。とにかく太平洋戦争の初期である。しかし、それでも後輩の家に遊びに行つて、その亡兄の遺した羽仁五郎の本を読んだり、古本屋と懇意になつて経済史の研究を見たりしたものだつた。だから「氷川清話」その他で、勝海舟というのは中々口も悪いし、面白い人間だと思つている時政治史の講義で、敬愛する教授が、「大した人ではありませんよ」などというのをきくとガツカリして、政治史に興味を失なつたりしたものであつた。だから、私にとっては、最近の子母沢寛の勝海舟ものや、司馬遼太郎の幕末ものは、よく調べてあるので、読んでも面白く思われる。そればかりでなく、そこに描きだそうとする、勝海舟や坂本竜馬などの行動に、大衆時代小説のヒーローという制約の中で、ある

程度、夜明け前の、未来を展望する人間像を出そうとしている。ただし、そこにはまだ、民衆の集団はでてこない。

2

ところで、現在の時点で、幕末ものが大衆に人気があるのは、何故なのか。一つは、戦前からの演劇・映画・小説のヒーローが、歴史的にリアルな新解釈によって、活躍するからでもあろう。

しかし、その背景に、まだ幾つかのことがあろう。

第一に、現在のアジア・アフリカなどの新興諸国における民族解放闘争と共通した所があるという理解。これは歴史家の努力もあつて労働者や進歩的文化人の間によくひろがりつつあるし、また、保守の立場に立つ政治家や経営者は、全く百年前の明治維新と同じだということで中国革命やA・A諸国の民族解放闘争を理解する手がかりとしている。差違の方はあまり考えたくないであろう。

第二に、現在の日本も、新しい革新の必要が近ずきつつあるという理解。ただし、これも、保守の立場に立つ人々は自主憲法の制定だの、防衛庁の国防省昇格だのを考えながら、王政復古、国家主義を考えるだろうし、労働者階級の方は、内閣打倒などを考えるだろう。

それから第三に、現在の国際連合を幕府Ⅱ公儀に見立て、アメリカ帝国主義を幕閣独裁Ⅱ井伊大老と考えるなどという、少し珍らしい考え方を話してくれた友人もある。発想は、井伊直弼の一生を、「花の生涯」として描いた小説とは対照的なものがある訳だろうか。

中華人民共和国を長州藩に見たてたり、インドシナ戦争を新選組の切り込みだといったり、マレーシア連邦を極東につくったイギリスを会津藩と考えたり、なかなか手がこんでいて、ただ日本を薩摩藩に考えようか、土佐藩に考えようか、迷っている。それでも、幕末の土佐の隠居大名山内容堂は、外に勤王論、藩内はかなり保守的弾圧をおこなったというから、ドゴールのフランスとでも考えるかなどという。それなら、ソ連を何の藩に見たてるとのだからかい半分にきくと、案外、まじめな顔をして、もちろん、水戸藩だ。国連の創立メンバーとしての重要さは、天下の副將軍にも等しく、その革新の理論は天下に影響したではないか、などという。何のために、そんなに細かく役割をあてはめて考えているのか分らないが、とも角、うっかり聞けば、まだまだ、珍奇な類推を持ちだしかねないので、正月早々、私より呑気な者もいると、あわてて話をうちきった。

しかし、私にして見ると、せいぜい、アメリカの原子力潜水艦の「寄港」強行をさして、幕末の黒船来と対比するだけでもいうのではないか、それならもう、チャホラ、市販の新聞雑誌の中にも語られているので、余り珍らしいことではないと言ってやろうと、ひそかに対話の中に考えていて、急に、こんな、もう一まわり珍奇な、国連Ⅱ幕府論をきかされたのだから、いささか面喰らったのも事実である。そればかりか徳川政權二百七十年、俗に三百年の太平という期間、国際連合の僅か二〇年目の現在までの期間とでは、余りに違いがありすぎるようにも思った。けれども、一方で、日本でも二〇年たつと、一応、第二次世界大戦後の唯一無二の国際政治組織とばかり考えないで、インドネシアの国連脱退に刺げきされたのか、

中華人民共和国、朝鮮人民共和国、ベトナム民主共和国、ドイツ民主共和国などのように国連組織に入っていない国もあるという点に目をつけたのか、国連分担金問題にかんする米ソ論争によって朝鮮戦争やインドシナ戦争ばかりでなくコンゴ問題の国連軍派けんを非難する意味か、その辺は何とも分りかねるが、批判的に国連を考える人も出てくるものだ、と妙な所で感心したりしたのである。

3

そして、この随想もしめくりをどうつけようかと頭をひねり出した時、文部省中央教育審議会の特別委員会中間報告「期待される人間像」が出た。これについては、教育勅語の現代版だとか、明治初年の五箇条の御誓文の開明性を教育勅語と欽定憲法で天皇制絶対主義の専制的性格の完成にきりかえたように、改憲の地ならしだとかいう批判をすでに私も前から耳にしていた。

これについての批判・注文は「青少年教育の指針となる人間像をつくる」という重大問題だけに、多数出るのもまた当然で、文相のいうように「活発な論議を経て理想的な人間像をつくるのが好ましい」といえよう（一・一・一朝日夕刊）といわれているので、ILO八七号批准問題で、その中央交渉を認めるか認めないかが対日調査団も来た現在の国会の焦点となるだろう日教組の、全国教育研究集会が開かれる直前には、「一点の非の打ちどころもない」（一・一・一四毎日、高石真五郎氏）という言い方もされようが、いずれにせよ、活発な論議を呼ぶこと、まちがいない。とりわけ、民主主義を強調しながら、国民主権も、基本的人権の尊重も少しも表立って説かれ

ず、逆に、国旗・国歌・天皇の敬愛が強調され、「祖国日本を敬愛することを深く考えるべきである」などと書かれているのを見ると、オリンピックと自衛隊を青少年教育の目標にするのかと頭をかしげたくもなる。また、「世界に開かれた日本人であれ」という、序論の第二の要請では「日本が西と東、北と南のかけ橋であることを知らなければならぬ」などといひながら、第三の要請では、「世界が自由主義国家群と全体主義国家群の二つに分れている」などという、到底「かけ橋」になどなれるはずのない、アメリカでも保守的の考え方そのまゝを押しつけようとしている。冷静に考えれば、世界の百数十国のうち、自由主義国家群とは、どれとどれであるのか社会主義国とA・A・A諸国のどれとどれ、あるいは全部を全体主義国家群と呼ぶのか。アメリカやイギリスがかつてナチ・ドイツやファッショ・イタリアを全体主義国家と呼んだ時には、それは民主主義を否定する独裁国家と考えていた。今、社会主義国やA・A・A諸国が自国を全体主義国家と呼ぶか、あるいは全体主義国家群と規定されることを、友好的な規定と考えるか。

その他、問題となるところは少なからう。ただ私は、これが、日本の青少年が現在の支配層にとって「期待される人間像」だということから、しみじみと悲哀感をもってこれを読んだ。なぜ悲哀感をもったかという点、ここに期待される人間像は、一言にしていえば、明治への郷愁であり、明治的人間像なのではないか。そして、大多數の委員の人々は、その年配から推して、この「明治的人間像」の古さの押しつけになっていることが、つまり復古調といわれが、理解できないか、あるいは理解しようとはしないだろうからで

ることある。ほんの一例をあげよう。これは、男女平等を前提にして考えられた「人間像」であろうか。この委員の人々は、本当に、男女平等に、社会人としては第一に「仕事に打込む人となれ」また日本人としては「たくましい」「風格ある」日本人たることを期待しているのだろうか。それとも、男子たるものにこれを期待し、そのうちのいくつかを女子に準用するに止めようとしているのだろうか。そして、ここにおいて、私はブームとなっている幕末への連想のとりことなってしまうのである。

これは、百年前の明治的人間像への期待である。何かそれは黒船入来以後の幕末における武士道ないしは士道の奨励振興にも似たところがありはすまいか。黒船入来に対して、封建諸侯から下級武士まで、それぞれに危機意識を持った。それは幕藩割拠体制になれ切った眠りをさまし、日本の国の危機を意識させ、結局は明治維新によって中央集権国家をつくり出した。また、強制された開国に対するを抵抗あれこれ試みながら、攘夷にも艦船銃砲の輸入が必要になり、幕藩体制のままの攘夷が実行不可能とわかると、雄藩の藩政は改革され、ついに討幕となった。この幕末ブームがよく取扱う、激動の過程の当初、幕府や各藩では、鎖国を維持するための攘夷として士道奨励がとられたらしい。そして、日本外史のような封建割拠の源泉を見渡して日本全体の観念を与える歴史物語で、徳川幕府という現在権力をも、歴史の中に徳川氏政権として見ることを可能にする批判精神が、ロマンチックな漢詩とともに喜ばれた。また、剣術の奨励によって、長い太平の間、固定された幕政・藩政に参与する石高・家柄の秩序は、動揺の兆しを見せた。祖先の槍先の功名による

石高や家柄は、必ずしも当主の剣術の強さを保証しなかったから。だから、士道奨励自体もいくらかは太平の眠りをさます刺げきになったか。しかし。結局それだけでは三百年前、銃砲と治民政略の勝利の上の織豊・徳川の天下統一をも忘れた反動的な精神主義でしかなかった。委員の多くの人々における個人主義・自由主義は、その長い成功街道の体験や貫ぬいてきた学問的立場による信念であろう。それであるからこそ、この「人間像」作成の重責を与えられたのだろう。もちろん、林健太郎教授でさえ指摘したように「主題はバラバラ」(一・二朝日夕刊)かも知れない。しかし、委員の多数はそれぞれ体験や学問に信念を持つ人である。だから、明治的人間像への期待は、共通した基調となっている。

そして、それにもかかわらず、それが古いのである。それは、新しい社会の新しい人間像という訳にはゆかないのは勿論であるけれども、一九六〇年がアフリカの年、今年はアジアの年などといわれるようなA諸国の激動、社会主義諸国の発展、EECの変化、中南米諸国の動き、そして宇宙時代などという現在及び近い将来の国際環境に耐えられる人間像だろうか。また、大きく産業構造の変化をとげて、労働者階級が人口の過半を占めるに至り、社会保障と保健教育、そして労働問題となるであろう国内社会にとっても新しい時代にどの程度通用する人間像だろうか。幕末の剣術や士道奨励と如何。

(文学部教授・労働問題)